

全国的に見ても乗車料金の高い泉北線で、ミナミと呼ばれる大阪府の道頓堀周辺にある北堀江の古着屋で働くリクくんに会いに行く最中に、空席の優先席の前で吊り革を掴んで立っている男が突然笑った理由が分からなかったが、視線は安定していなくて車内は平凡そのものだったから、何か楽しいことでも思い出したのだろうと考えることができた。

終点のなんば駅に到着して、開いたドアを出て改札を抜けた先のエスカレータを、東京とは違い右側に立ち止まって降りていくと、駅前の道路を改装して2025年に完成した作歩行者天国が見えたから、行った。

大通り側に喫煙所があったので近づいて、扉を開けると電子タバコ専用の部屋だったから、さらに奥の扉を開けて紙タバコ専用の部屋に入った。

ウINSTONのキャスター3ミリを左手で取り出した。この銘柄はすでに生産終了しているのだけど、一年ほど経った今もコンビニで売られている。その事実が、もうすぐ在庫がなくなるかもしれないという不安に変わり、さらに、在庫がなくなるのはいつなのかという疑問にすり替わっていった。そんなことを考えていると、タバコを挟んでいた右手の指が絡まって、小指の第一関節に火種が当たり、火傷した。

吸い終わったから、扉を開けて電子タバコ専用の部屋に入り、さらに扉を開けて外に出ると、太陽は沈んで空は暗かったし、下がった気温は一月という季節を実感させる。

喫煙所を出て左手に見えるエディオンの隣のカラオケには友人らと行ったことがあって、リクくんと言シくんは高校の制服を着たままだったけれど、年齢確認はされなかった。

リクくんが歌った秋川雅史の千の風になつては、上手くなかったけれど心に響くものはあって、それは早朝のテンションで満たされた四畳ほどのカラオケルームが、リクくんの野太い歌声を脚色していたからだけど、俺の歌結構上手いんじゃない？と言われたから、うん、上手いと思うと言ったら、リクくんは嬉しそうにしていた。私のお墓の前で泣かないでください、そこに私はいません。っていう歌詞が良いよねと言シくんが言ったから、そこに居ないなら私はどこに居るのかな、なんて言ってみたら変な空気になって、ちょうど良い時間だしそろそろ帰ろうかとリクくんが言ったから、泉北線の始発に合わせて、歩行者天国へと改装工事中の駅前の道路を超えて、なんば駅に着いた。

北堀江に向かう前に、なんばのホコ天に居るからもうそろ到着する。とリクくん連絡を入れた。北堀江にある古着屋に着くとリクくんの風貌はまるつきり変化していて、青臭いけれど真面目な好青年という印象だったのが、ラッパかヒッピーか分からないけれどカラフルな洋服とニット帽を纏ってヒゲも伸ばすようになってる。低身長は変わらないけれど、明らかにガタイが良くなっているから、筋肉が肥大してるのだろう。

久しぶり、とリクくんが言ったから、久しぶり、だいぶ変わったね。と言ったら、うん、変わったと思う、と言われた。

リクくんがいきつけどと言う、熱帯魚が泳ぐ水槽で小洒落さを演出しているであろう趣味の悪い居酒屋の居心地が良かったから結構飲んで、結構飲んだから筋肉が肥大しているね、と言ったら、イケてるっしょ、鍛えてるんだよね。と言われて、え、そんな感じだったけ？と言おうとしたけどやめて、そうなんだ。と言ったのは、リクくんの大胸筋と上腕二頭筋だけが大きく膨らんでいて、イケてるっしょ、について深掘りするよりも、集中的に鍛えられたであろう不自然な筋肉に目が奪われていたからだった。

結構鍛えてるの？と言ったら、うん、ジムに通ってる。家でトレーニングをしていると続かないからと言われた。モリくんは痩せたね、と言われたから、もう柔道やめたから、と言ったら、勿体無いよ、と言われた。楽しかったんだけどね、とジョッキを店員に渡しながら言ったら、ずっと弱かったもんね、とホッピーを追加注文してから言われた。

夜に寝れないぐらいアトピーが酷くて、と言ったら、ステロイドを処方しておきますね、と皮膚科の先生に言われたから、ありがとうございます。と言った。

全身に広がった湿疹の痒みはステロイドによって治ったけれど、肌には茶色のシミが残って、薬の副作用で両足には魚のエラに似た肉割れができてしまい、体育の授業では半袖半ズボンの体操服を着なければなくて、すね毛がまだ生えていない小学生の身体ではシミや肉割れを隠せなかったから母親のファンデーションを塗るうとしたけれど、隠すなんて嘘つきだ！

リクくんは大学を中退してブラブラしていて、自転車をデザインする専門学校へ通ったこともあったけれど続かず、今は北堀江の古着屋でアルバイトをしていて、適当に生きてる、と包み隠さず教えてくれた。

しばらくリクくんの話を聞いていたけれど、お前はどんなの？と聞かれることはなかったから、話すタイミングを掴めないまま終電の時間が迫り、会計を済ませてリクくんとは別れた。

そのあとリクくんは古着屋が入っている四階建ての小ビルに着いて、入り口の壁に立てかけられたclosedと書かれた看板を裏返すとopenと書かれた面にすり替わった。急勾配の階段を三階まで登ると左手に現れる店舗に戻って、オレンジ色の照明のスイッチを押し込んだ。

モリくんがまとめて払ってくれた飲み代の半分を、メッセージアプリを使って電子マネーで返した。なんばのホコ天辺りに居るからもうそろ到着する。とモリくんから届いたメッセージに今になって気づき、ごめん、今気づいた。とメッセージを送信したら、気にしないで。それとお金ありがとう。と返信が届いた。

アンティーク調に加工された机に乗っているレジスターの右隣に置いた携帯の真下にある引き出しに入っている、オーナーが海外から買い付けたと言っていたお香に火をつけると、モリくんと飲んでいたアルコールが抜けきっていなかったから、手を滑らせて左小指の第一関節を火傷した。

リクくんは左小指を火傷して、モリくんは右小指を火傷したから、左右は逆ではあるけれど、小指の第一関節という同じ部位を火傷した偶然に、少し笑ってしまった。

北堀江はアメリカ村よりも落ち着いている地域で、それは活気がないと言い換えられるけれど、新規参入と撤退が繰り返されることで持続している地域よりも幾分、生活に馴染んでいる。

東側にある堀江公園は、正方形のグラウンドを縦と横に道で分割して、中心に円形の広場を配置した形で、それぞれのエリアには異なる遊具が設置されている。休日になると親子連れで賑わう。

さらに東側には、垂直に伸びた大阪の背骨のような御堂筋線という地下鉄が通っていて、ずっと市営だったのだけれど、2018年から民営に変わったことで、大阪メトロと聞き馴染みのない名前では呼ばれるようになったけれどそれだけで、今も大阪の背骨として機能はしているし、便利だからよく乗っている。

2

ブザーが反響して切れ目の無い高音が聞こえたから、二人の男は左右の順に一步步前に進んだ。両手を前に出してから背骨を丸めることで自然に重心を下に移動させて、これから取っ組み合うかのような体勢を取ったのは、これから取っ組み合うからだ。

ウォームアップで慣らした肉体に流れている血液が、鼓動のたびに全身に巡る感覚を楽しみながら、互いに目を合わせて緊張と高揚で張っているテンションをプレッシャーに変換して共有しようとする。二人の距離は徐々に近づいて、間合いに入った。

伸ばした腕の先端にある手のひらが相手の首元の襟を握りしめ、上下左右に揺さぶられるとそれまで安定していたバランスが崩れてしまうから、必死に抵抗する。投げられまいと揉みくちやになっている二人の男の汗腺から吹き出した汗は飛び散って、人工皮革を使用した機能的な畳の表面に、吸収されることなく小さな水溜りを作っている。

襟を掴んでいる手を引き剥がし、袖を掴んで引く張ると二人の上半身は横斜めに傾いたから、素早く足を股下に潜り込ませただけで同じ速度で逃げられたため、組み合った肉体に流れる力関係は固定されずにいる。

血だらけのテープで補強された指や、潰れてカリフラワーのように膨らんだ耳は、過酷な練習を物語っているようだけれど、相手の口は硬く結ばれているからそれは、あくまで男の想像ではないし、右親指の内出血は練習によるものではない。

相手のくるぶしを足裏で外側に刈るよう押し込むことで、男が想定していた右足の移動距離を意図的に増幅させたから重心が斜め後ろにずれて、転んだ。転んだ後、すぐさまうつ伏せになったから、押さえ込まれてポイントを取られることは無かったけれど、明らかに不利な状況ではあった。

相手は手を潜り込ませて胸ぐらを掴み、勢いをつけて回転することで、うつ伏せの肉体を仰向けにひっくり返し、すかさず首の頸動脈を襟を使って締め上げると、瞬時に視界が暗くなって、それは気絶していたからだだったと気づいた頃には、すでに勝敗がついていた。

3

動体視力は優れているが視力自体は人間よりも劣る眼球で、こちらを見つめている猫には、ベンチに座ったまま動かないこの肉体が風景のように見えているのだろうか。

どんな法則性に従って対象が動いているかなど猫は考えるはずもなく、動体視力という生まれつき備わった機能を疑うことなく、獲物ではなく獲物に流れる力そのものを狩るのだろうと考えただけ、こじつけが過ぎるだろうと感じた。

大阪市の北堀江にある公園のベンチから立ち上がると、猫は走り去っていった。

その猫と反対の方向の、昨日飲んだリクくんが働いている北堀江の古着屋を過ぎた先にある病院から、会計の順番が近づいたと通知が来たので、処方箋をもらいに戻った。

歩きながら癖で、いつの間にか爪を噛んでいるから、気づいた時に辞めるようにしているけれど、その頻度があまりにも多いため、指先の肉も同時に噛んでしまっているようだった。特に右親指の先端の状態が悪く、常に内出血の赤紫色で染まっていて、水膨れができることもあるけれど、すぐ噛み潰してしまうから気にしたことはない。

別に大したことではないのだけれど、十数年近く毎日繰り返しているとなると話は別で、指先の小さな痛みが習慣化し、それを背骨として生活が肉付けされているため、多分きつと、この親指の先端に私がいる。私がいるはずの親指の先端を顔に近づけて、指先を観察するとさかむけがあったから噛んでちぎった。

自動ドアから病院の内側に入ると北欧の豊かな自然の風景画が飾られているから癢に触るけど無視して、白い殺風景がいつまでも続きそうな廊下を進んで、正面に小児科が見えたから右に曲がり、放射線室を通り過ぎようとする。

数人の看護師が移動ベッドを囲んで背後から向かってきたから横に避けると、砂肝に近い色彩の皮膚はでシワだらけで、少ない毛髪は真っ白の、何本もの透明なチューブが鼻と口、手の甲に取り付けられた、紙ぐらい薄い患者衣を着た老婆が乗っていて、進行方向が同じだったので追いかけるように進むと会計のロビーに辿り着き、自動精算機が横一列に並んでいて、その一つに診察番号を入力すると8300円と液晶に表示されたから財布を見ると、現金だと足りなかったからカードをかざして支払った。

発行された処方箋と領収書を手に持って病院から薬局へ移動した。

診察室にある回転式の椅子に座り、東京の美術大学を休学していると、重厚感のある椅子に座って綺麗な白衣のポケットにボールペンを挟んでいる心療内科の先生に伝えたら、そうなんですね、何を学ばれているんですか、と言われて、どう伝えればいいかわかりませんと言っと、そうなんです。薬は一ヶ月分で足りるますか。と言われたから、はい、ありがとうございます。と言って診察室を出た。待合室にいる患者の集団は年齢や性別に偏りはなく、ランダムに集められたように見えるけれど、何らかの法則で大阪市にあるこの心療内科の待合室に流れてきたのだらうと、思えなくなかった。

処方箋を薬剤師に渡して薬を受け取り、前回飲んだ薬の効果はとくに切れていて脂汗が止まらないから、薬局のトイレの手洗いの蛇口から出てくる水道水で、手のひらに取り出した数種類の薬を飲み込んだ。だからこれ以上体調が悪化することはないので少し安心した。

4

十二月の新宿の映画館でデートをした帰りに、東京都の八王子市にある下宿先のアパートの近くに住む友人を尋ねて、ボードゲームを数人で囲んで盛り上がっているときに、明日か明後日に大阪に帰るんだよねと言うと、俺も静岡に帰るんだよね、と言われて、俺は東京だから、と言われて、そろそろ年越しだねと言ったら、いつの間にかイカサマをされていたから、負けた。

友人宅から自宅まで十数分で帰宅するともう午前二時だったから、ベッドにうつ伏せで眠ろうとしたけれど、目を閉じると今日の出来事を鮮明に思い出してしまい、実際にその場にいるかのような錯覚によって興奮が冷めずに眠れなかったから、ベッドのフレームを掴んで床から起き上がり時計を見ると午前五時で、パニックで過呼吸になっているため、手足の先端は痺れて感覚がない。

床の上は帰省のために準備していたと思われる衣類が散らばっていて、部屋の角には八王子市指定の黄色いゴミ袋が二つ並んでいる。そのゴミ袋の中には薬局で処方されたと思われる薬が、恐らく間違えて捨てられていて、男はそれ知っていたかのように取り出して飲み込んだ。飲み込まれた錠剤は食道を通り、胃へ落下したから消化液が分泌され始めた。溶けた有効成分が腸の壁を通過して血管に混ざり、心臓の拍動によって全身へと循環した。

人体の内部では、そうした循環は特別なものではなくて、日常的に繰り返し行われている生理的な過程であり、吸収された成分は血流に乗って各器官へ自然と運ばれていって、面白なと思った。

明日か明後日に大阪帰るから、会わない？とモリくんから通知が来たから、メッセージアプリを開き、久しぶりじゃん、もちろん、と返信して続けて、北堀江の古着屋で働いてるから来てよ、とリクくんはメッセージに住所を添付して送信した。